

2024年9月21日 自然を語る会
『沈黙の春』第14章 「四人に一人」

場所：飯田橋ボランティアセンター＋zoom
参加者：19名
担当：北沢さん

14章はがんの話です。担当の北沢さんは『沈黙の春』以外に『ヒトはなぜ「がん」になるのかー進化が生んだ怪物』（河出書房新社）と『レイチェル・カーソンに学ぶ環境問題』（東京大学出版会）の2冊も参考に話を進めてくださいました。

がんは太古の昔から存在していたけれど、人間が現れると、発がん物質を人間自身ができるようになり、特に20世紀以降は無数の化学的発がん物質に取り囲まれてくれています。発がん物質にはここまでなら大丈夫という閾値がありません。一つ一つが安全と言われる量を摂取していても、二つ以上の薬品が組み合わさって破壊力が倍加することもあります。

がんの治療が先か、予防が先か・・・予防というものにもっと力を注いで、発がん物質を無くした安心できる社会を作っていくことが大事です。

その後の話し合いで、「がんの因子はだれもが持っている、それががんになる引き金が多ばこや飲酒、感染、化学薬品など。」という指摘もありました。私たちがいつも食べているパンなども、安い、おいしい・・・けれどラウンドアップなどの除草剤を使って作られているものも多いようです。国産の小麦はラウンドアップフリーだそうで、国産小麦のパンを買うのが安心だそうです。その他、おいしい果物も、農薬や化学肥料たっぷりのものがあるので気をつける必要があります。

実際に農作業に参加してみて、どろどろの田んぼで、長靴もとられてしまうようなところで草むしりをやったりするのは、高齢化社会ではとても大変だという話も出ました。もちろん、だからと言って除草剤をまくということではないのですが、どうしたらいいのか。

その後、PFAS についての話になり、本の紹介がありました。フッ素化合物の開発が原子爆弾の製造を促したのだそうで、そんな歴史があったのかとびっくり。現在、日本各地で、特に関東では多摩地区でも地下水からPFASが検出されており、心配です。

『沈黙の春』が書かれてから60年たっているのに、状況は全く変わっていません。私たちは危険な物質がどのように生活に入り込んできているのか、情報をもっともっと知らなくてはいけないと思います。そして、自分たちの生活をしっかり見つめながら生きていく必要があるのではないのでしょうか。

（紹介された本）

ブックレット『身近なPFASから身を守る本』（食の安全・監視市民委員会）

ブックレット『永遠の化学物質 水のPFAS汚染』（岩波書店）

（記録 小川）